

6月3日ゼミは開催します**伊勢神宮の創建Ⅱータカミムスヒの伝来**

—6月3日ゼミ紹介文:増田修作会員記—

I. タカミムスヒからアマテラスへ、皇祖神の交代劇

タカミムスヒが古くは皇祖神であり、天の至高神であったことは、日本書紀の天孫降臨神話一つ取り上げても明らかで、一方アマテラスについては7世紀末頃まで地方神であったことを裏付ける伝承が得られている。従ってタカミムスヒからアマテラスへという皇祖神=国家神の交代劇が起き、それにもなって伊勢神祠が伊勢大神宮に変化したことは疑えない事実である。(「王権神話の二元構造」溝口睦子氏)

II. タカミムスヒの伝来

それではこの交代劇の一方の主人公であるタカミムスヒは、いつどのようにして皇祖神の地位を占めるようになったのだろうか？

1. 出雲王国の誕生・発展・衰亡

出雲は、その地理的環境から弥生時代を通じて北部九州と並んで列島の表玄関であり、弥生中期には高句麗系部族が渡来して、高句麗の文化をもたらし、その影響を強く受けたと考えられている。皇祖神タカミムスヒは、このような高句麗および朝鮮半島との古く、深い文化交流の中から出雲を通じて日本にもたらされたものとする。北九州と並んで、日本海ルートによる鉄の供給拠点であった出雲は、鉄供給によって結ばれた吉備、大和、丹波、越などの諸国と大和纏向地域を拠点に、出雲を盟主とする地域連合体政権を形成すること

となった。しかし200年頃九州から進出した饒速日族が、出雲連合に参加し、やがてその実力によって出雲連合国家のリーダーの地位を出雲王国から奪い取ったストーリーが想定できる。銅鐸の出土状況の変化、国造氏族の分布、そして一部の出雲族の東国への移動などが、連合王国のリーダーの交代を示唆している。出雲の国譲りの神話はこの連合王国のリーダーの交代を伝えるものであろう。

2. 大和・出雲（饒速日）連合王国の成立→大和政権の樹立

崇神天皇はこの饒速日尊の血筋を引く天皇である。父は鬱色謎命を生母とする開化天皇、母は伊香色謎命でいずれも饒速日尊の六代の裔である。それまでほとんど磯城県主、十市県主など大和の地方豪族と通婚してきた大和大王家は、孝元天皇の時代に饒速日族との婚姻関係を結び、その結果、崇神天皇の時に大和・饒速日連合が成立したと考える。連合の盟主となった崇神天皇は、饒速日勢力を背景に四道將軍の派遣、東国攻略など王権の拡大を図り、一方原大和王国の神宝であった「八咫鏡」と「草薙の剣」を宮中から退下し、饒速日族との連合維持のために出雲の祖神タカミムスヒ、カミムスヒを皇祖神と仰いだ。

3. タカミムスヒの伝来まとめ

タカミムスヒは、高句麗の始祖伝承に由来する太陽(天)神であって、その伝承が出雲にもたらされ、出雲の始祖神カミムスヒと結びついて誕生した神である。出雲にはもともと出雲西部の出雲郡を本拠とした出雲神族(大国主族)と、東部の意宇郡を本拠とする意宇氏(出雲臣氏)が並立していたが、銅鐸祭祀による

連合のリーダーとして君臨していた出雲神族から饒速日族へのリーダーの交代劇が起こった。これが出雲の国譲りのモデルとなった出来事である。この時この交代劇に意宇氏が国譲りを実現することに貢献してその領土を保ち、さらに出雲西部も版図に加えて出雲国全体の首長となるが、5世紀半ば大和王権に臣従し、出雲臣の姓を賜与されることとなったと考える。タカミムスヒは高句麗から出雲に渡来して意宇氏に祀られていた神であり、意宇氏の国譲りへの貢献の褒賞として饒速日連合王国の主神として、次いで大和王権の祖神として祀られることになったものと思う。

Ⅲ. 神々の序列と記紀神話

記紀神話は、第1群 出雲神話、第2群 九州王国の高天原神話という独立した二つの地域の神話群を融合し、さらに王の出自を天とする政治的主張である第3群 天孫降臨神話・神武東征神話を加えて編集されたものである。

出雲神話の神々、高天原神話の神々は、本来全く異なる時代と地域で活躍していた神々であるが、一元的な歴史書である記紀編纂のために両群神話が融合され、神々は初めて同じ舞台（同じ場所、同じ時代）に立つこととなった。天神系、地祇系、ムスヒ系という神々のグループあるいは序列もこの頃定まったものと思う。こうして定義された天神（高天原神話系）・地祇（出雲神話系）と別天神（ムスヒ系）の神々が記紀の中で融合し、神々の序列が神話によって一元的に定められ、その結果は各氏族の始祖神にも反映されることとなった。

また記紀神話の白眉である出雲の国譲りのモデルは出雲神話群の一部である。出雲には出雲神族（大国主）から天神族（ニギハヤヒ）への国譲りすなわち出雲連合国家リーダーの交代の史実があり、これが出雲の国譲りとして伝承された。書紀の国譲り・天孫降臨神話はこの出雲神話を原型として編纂されたが、出雲族から高天原族への国譲りに変更したうえで、最終的に神武東征伝説に接続するために、内容（司令神（カミムスヒ・タカミムスヒ→タカミ

ムスヒ）、降臨神（ニギハヤヒ→ニニギ）、降臨地（河内・哮峯→筑紫日向・櫛觸峯）が改変された。
以上。

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
- 2、JR水道橋駅（東口）・都営三田線水道橋駅（A1出口。A3出口はエレベーター有）下車徒歩1～2分
- 3、電話：03-3816-4196

気候変動（Climate Change）、地球温暖化

について—磐城 妙三郎会員記

我々がよく耳にする地球温暖化に関するキーワードとして「温室効果ガス」「京都議定書」「IPCC（気候変動に関する政府間パネル）」といったものがある。これらの言葉がメディア媒体に取り上げられる数が大幅に増加したのは京都議定書の効力が発生した2005年以降であったという。実は1970年代には逆に寒冷化が心配されていたことを覚えているだろうか。気候研究者の中には1940年をピークに30年間寒冷化が続いており、やがて氷期がやってくると真面目に考えていた。ところが1970年代を境に一転して気温が上昇傾向に移ったため、温暖化に警鐘を鳴らし始めた。過去の気候変動は概ね10万年周期と言われている。現在の温暖期は1万年以上続いているが、その前の温暖期は約10万年前、その前は約20万年前であった。温暖期の期間はおおよそ1万年から2万年続くと言われるが、その間の9万年から8万年は寒冷期である。地質学では前者を間氷期、後者を氷期と定義している。なおグリーンランドと南極大陸には厚さ3000mを越す氷床があり、現在も氷河期は継続している。人類にとって寒冷化と温暖化とどちらが有利に働くのだろうか。ホモサピエンスは誕生以来、寒冷化も温暖化も経験しているがそれはアフリカ大陸での経験であり、出アフリカ以降数万年にわたって氷期を経験し、初めて最近の1万年を温暖な間氷期を経験しているのである。寒冷化は高緯度地域の氷床を大きく拡大させ、海水面を100m以上

も低下させ、降水量を減らし乾燥化で内陸部に広大な砂漠を生み出した。更に地中海や黒海を大西洋から孤立せたともいわれている。温暖化はその逆の現象を生み出すのだろうか。IPCCの報告によればグリーンランドと南極の氷床が全て融解すると海水準面を前者では7m、後者では61m上昇させるといわれている。気候変動は地球の公転軌道や自転軸の傾斜変動、更に歳差運動が最大の要因とされ、それぞれ約9.5万年、4.1万年、2.2万年周期でその三つが合成されて約10万年周期で気候変動が繰り返され、これをミランコビッチサイクルといわれている。これに大気循環や海流の循環、太陽の黒点活動、火山噴火などの要因が加わり更に変動の様子を複雑にしている。IPCCの評価報告書に基づく国際連合枠組条約の京都議定書の効力が2005年に発効した。地球温暖化の原因となる温室効果ガスの削減を定め、共同で約束期間内に目標値を達成することが定められた。地球はエネルギーを太陽から受け、ほぼ同じ量のエネルギーを大気に放出することによって平衡が保たれる。地球の大気圏に温室効果ガスが蓄積されると放出したエネルギーの一部がその温室効果ガスに吸収され、大気圏が温室と同じ作用をして地球に温暖化をもたらすとされている。一般に産業革命以降の工業化によって二酸化炭素やメタンなど温室効果ガスの排出急増が温暖化を加速さ、最近の異常気象を引き起こしているとされている。これに対してバージニア大学のウィリアム・ラジマン教授はこの定説に異議を唱え以下の仮説を発表している。南極の氷床には過去数十万年の大気が閉じ込められている。ロシアやヨーロッパ連合及び日本によって3000m以上の氷床コアの掘削が行われ、採取された氷床コアから過去数十万年にわたる大気の実験が行われた。その結果、気温の変化、酸素同位体比率の推移や二酸化炭素やメタンの濃度が解析され約10万年周期で増減を繰り返しており、ミランコビッチサイクルと連動していることが証明された。ところが最近の1万年については、二酸化炭素もメタンも減少していきのが本来

の姿なのに拘わらず、二酸化炭素は8000年前、メタンは5000年前から増加に転じていることが判明した。ラジマン教授は人類による農耕牧畜の開始と森林伐採が原因であるとし人類活動が無ければ地球はすでに氷期に向かっていたと主張し、学会に衝撃を与えた。現在の温室効果ガスの濃度は過去の間氷期の濃度を遥かに超えている。今後も温暖化が継続して氷床を消滅させ氷河期を収束させるのか、それとも再び氷期への扉を開くのか、それは千年後なのか、1万年後なのか、人類は環境に適応できるのか、絶滅してしまうのか、火星への移住が実現しているのか、果てしない空想が続くばかりである。以上。

2023年後期のゼミ日程

本年7月以降のゼミ内容（古代史ニュース316号掲載）が、講師の都合によって一部変更になりましたので、改めて下記の通りご案内します。

記

7月1日：①ホモサピエンスの新大陸への拡散ルート

②新大陸唯一の高度文明・マヤ文明の紹介
—磐城 妙三郎会員

○8月は猛暑予想の為、休講とします。

9月9日（会場の都合で第2土曜日です）

北海道のオホーツク文化・トビニタイ文化—
倉重 千穂会員

10月7日：『新しい騎馬民族説の証明・バージョニイ』—槌田 鉄男会員

11月4日：黄禍論—近現代史の視点—
齊藤 潔会員

12月2日（予定日です）：

①修験道について—市川 達雄会員

②倭国と日本国—鈴木 慧会員

以上。

（本号は3ページです）